

軽井沢

旧碓氷峠 (見晴台) 関係の文学碑・記念碑

高橋光広



輕井沢 旧碓氷峠
(見晴台 熊野社)
関係の文学碑・記念碑

高 橋 光 広

昭和22年 東北学院(英文科)中退
小・中・高等学校教員歴任
昭和55年 病氣退職，以後療養中
現住所 栃木県今市市千本木343の3

軽井沢 旧碓氷峠(見晴台)関係の文学碑・記念碑

昭和60年12月20日発行

著 者 高 橋 光 広
発行者

印刷所 (株)松井P.T.O印刷
宇都宮市平出町4287-8

定価 800 円

まえがき

軽井沢は保健休養地・避暑地、さらには国際的な観光地であるが、町内には三十基以上の文学碑、二十基以上の記念碑等があり、文学碑・記念碑の町とも言えそうである。

このうち、旧碓氷峠の見晴台・熊野神社、またその周辺関連地域には約二十基の文学碑・記念碑等が建立されている。しかもこれらの碑のほとんどは、軽井沢の（あるものは松井田町側の）歴史的・地理的、文化的なものを背景としていて、軽井沢町内部に深くかわつてゐる。あるものはこの地域だけではなく、日本の歴史の一端をさえのぞかせてゐるものもある。

軽井沢観光の必見地として、最近この旧碓氷峠を訪れる者がますます増えている。しかし、果たしてそのうちの何割がこの地の歴史的・地理的意義、さらにはまた軽井沢の一面を象徴する地としてのその意義を理解していくかはなほ疑問である。

もちろん、見晴台に立つて、上・信両面に開けた雄大な光景を眺めて、晴れ晴れとした気分になり、熊野神社に参詣して、ありし日の碓氷峠の一端をしのべば、それでこの地来訪の目的は一応達せられたとも言えよう。

しかし、それだけでは、せっかく天下の碓氷峠に来たのに、あまりにも一般観光的・物見遊山的であって、もの足りないのではなからうか。この地来訪の意義をより深めるためには、ここに建てられているいくつかの碑の建碑の意味を少しでも多く知ることが必要なのではなからうか。そのためには、現地の碑文や説明板を観光案内書等と突き合わせて読むことであろう。

とは言え、一つの碑を見つつ考えていると、いつしか疑問が生じ、どうしても案内書や説明板以上のことが知りたくなってくることもある。

本書は、そうした人たちの疑問に答え、さらには背景にある必要な未知事項をより明らかにしようとして、他県人の筆者が第三者的な立場から、できるだけ客観的に書いたものである。

一般の人がだれでも分かるようにと心がけたつもりであるが、筆者自身の個人的な興味にかたより、また遠地の者のこととて調査不十分な面もあるが、これまで顧みられなかった面もかなり深く掘り下げたつもりである。この地を訪れる人のために、一般案内書以上に、いくらかでも参考になれば幸いだと思うものである。

目次

旧碓氷峠(見晴台 熊野社)の文学碑・記念碑配置図

まえがき

見晴台及びその周辺

1	タゴール胸像	1
2	建国記念塔	21
2'	上信国境線	32
2''	方向指示盤	38
3	近藤翁頌徳碑	42
4	万葉歌碑	49
4'	曾根氏の墓	60

熊野神社及びその周辺

5	重石丸数字の歌碑	67
6	碓氷貞光靈社記碑	72
7	宗良親王歌碑	80
8	山口誓子句碑	93
9	杉浦翠子歌碑	98
10	数字の歌碑（みくにふみの碑）	107

碓氷川水源地

11	相馬御風歌碑	110
12	水神の碑	116
13	明治天皇峠御膳水碑	122
	（明治天皇峠御小休所碑）	

上州側への下り道

14	関橋守歌碑（思婦石）	135
----	------------	-----

15	金原忠藏忠魂碑	142
----	---------	-----

（金原藪・金原忠藏首塚の碑）

16	一つ家の歌碑	152
----	--------	-----

旧碓氷峠下り道

17	旧碓氷峠下り道の馬頭観世音碑	159
----	----------------	-----

横川駅周辺

18	碓氷関門復原碑	179
----	---------	-----

19	横川の北原白秋歌碑	186
----	-----------	-----

ま と め

あ と が き

主 な 参 考 図 書

見晴台及びその周辺

1 タゴール胸像

(1) 位置

見晴台への古めかしい門（鉄鋌門^{てつひょうもん}）を入り、平坦地に出たすぐ左手、建国記念塔の左側にある。

(2) 胸像の状況

① 本像

高さ約一二〇センチ、幅七〇センチほどの方形の台石の上に、高さ九〇センチほどの胸像が据えられており、台石にはローマ字横書きで、

ラビンドラナート・タゴール

ヒ・タカタ

一九八〇

とある。

② 背後の塀

背後の高さ一辺ほどの白亜の塀の右端には、

詩聖タゴール

○○○○○

人類不戦

中村元書

とある。○○○○○の部分はインド語で「アヒンサー」と読むようであり（ベンガル文字よりも一般性のあるデーヴァナーガリー文字で書かれたという）、原義は「不害」、「不傷害」で、拡大解釈すると「人類不戦」になるという。「アヒンサー」はガンジーやタゴールに共通する根本的な理念であつた。

また左端には、

軽井沢町長 佐藤正人

詩聖タゴール像設立発起人代表 谷川徹三

日本タゴール協会会長 高良とみ

日本女子大学桜楓会会長 菅支那子

軽井沢文化協会会長 内山尚三

とある。

③ 説明板

昭和六〇年四月に建てられたもので、タゴール胸像の右手にあり、タゴールの生い立ち、思想、来日、来軽の経過などが要領よくまとめて書かれている。

(3) 建設年月日と建設者・除幕式

これについては昭和五六年八月二日付の中日新聞が、胸像の写真入りでほぼ次のように報じている。

日本タゴール協会（高良とみ会長）は、インドの詩人・タゴールの胸像をゆかりの地、北佐久郡軽井沢町碓氷峠見晴らし台に建設していたが、このほど完成した。二日、哲学者の谷川徹三氏ら関係者約百人が出席して、除幕式をする。

タゴールは在日中の大正六年、同町旧道にある日本女子大三泉寮で講師として教べんとした。当時、学生だった元参議院議員の高良さんが数年前から、胸像設立の募金活動を進めていた。

完成した胸像は一・五尺の台石に等身の二倍大で銅製。はるかインドの方を見つめる位置に建てられているが、除幕式にはインド大使代理やインドから舞踊団も参加する予定。

なお、胸像の管理は軽井沢町で行う。

右の文で建設年月日と建設の中心になった人たちがほぼ分かるわけであるが、ただ、「はるかにインドの方を見つめる」というのには、すぐ前に「建国記念塔」があり、西方の眺望を妨げていて、いささか惜しいような気がする。

なお、日本女子大学同窓会紙の「桜楓新報・第三六二号」（昭和五六年一〇月一〇日発行）に、除幕式に参加した辻キヨ氏の報告が掲載されているので、ついでに、この項に関連のある前半の部分をあげておく（後半の部分はあとの項で追加してあげる）。

詩聖タゴール胸像

除幕式に出席して

31家 辻 キヨ

生誕一二〇年

一九一三年、東洋人として初めてノーベル文学賞を受賞したインドの詩聖タゴールは、今年、生誕一二〇年を迎え、日本でいろいろな行事が行われた。

日本タゴール協会長・高良とみ氏（元参議院議員・本学講師・14英）の発案により、軽

井沢文化協会^{（ツマ）}長・谷川徹三氏及び軽井沢町長の協賛により、高田博厚氏による胸像が軽井沢旧碓氷峠見晴公園に建立され、タゴールゆかりの人々の参列の下に八月二日に除幕式が行なわれた。胸像の背後の塀にはタゴールの言葉「人類は戦わず」と中村元氏の筆による文字が印されている。

当日はインド大使代理 T・チェルプト氏と谷川徹三氏の祝辞があり、私は学長代理として出席したので、タゴールと本字の関係を述べ、乾杯の音頭をとった。

次にタゴール大学でインド舞踊を学んだ康米那氏による「タゴールダンス」が胸像の前で披露された。その後名物の力餅を頂き、タゴールのブランコ（Jon）の詩がテープレコーダーから流され、金の鈴を振るようすばらしい二オクターブにわたる美しい声が緑の木々にこだまして響きわたった（後略）。

(4) 建碑経過

地元の町会議員で、タゴール像設立会の事務局長を務められた土屋吉衛氏の話を要約すると次のようになるであろうか。

④ 昭和五三年八月二日

軽井沢文化協会総会（於軽井沢高校）にて、会員の高良とみ氏がタゴール胸像建設計画について説明。協会として協力することを決定。

⑥その組織

会長 内山尚三（法政大学教授）

理事 松田智雄（図書館情報大学長）

宍戸 実（嘉悦女子短期大学教授）

水上 武（理博・東大名誉教授）

事務局長 土屋吉衛

⑦高良とみ氏とともに代表が軽井沢町長に協力を依頼。

⑧東京において、発起人会が開かれ、発起人代表として谷川徹三氏が推薦された。谷川氏は

彫刻家高田博厚氏に胸像製作依頼。

⑨内山会長以下募金などに奔走協力する。

⑩建碑場所は、三井別邸裏の高台の、タートルが来軽した時よく瞑想したという樅の木の下⁽²⁾

に建てたい意向であったが、タートルが愛した浅間山が望見できる所ということで見晴台が選ばれた。見晴台も最初は西端を希望したのであるが、私有地にかかってしまうので、町有地である現在地に決定した。

注

（1） 旧軽井沢中心街の北方一〇〇ほどの地で、愛宕山の南ろくにある。明治の末に三井三郎助氏がここに十

万坪ほどの土地を求めて別荘を建てた。三郎助氏は、あの有名な三井家の一門（小石川家）である。三井本家の八郎右衛門氏の別荘が西野沢原（現在の別荘番号一八二〇）にあるので、これに対し三郎助氏の別荘は三井別邸とよばれた。日本女子大学の創立者の成瀬仁蔵氏がこの地へ来た時、裏山の大きな樅の木を見て「この下で学生に反省及び黙想をさせたら、いい修養になるだろう」と言われたのが契機となって、三泉寮が建てられたという。現在はこの地の大半が日本女子大学に寄贈された。つい最近まで、三郎助氏のとを継いだ高修氏の夫人の広子氏の所有であったが、その広子氏も亡くなられて、そのお子さんの所有になった。

(2) 現在、この木の下には成瀬仁蔵氏の首像が建っている。現状では、樹木が生い茂ってしまっていて、ここからは浅間山は見えない。

⑧ 高田先生に依頼してあった胸像ができたので、昭和五五年一〇月二五日、高良氏、高田先生、町助役、内山文化協会会長ら幹事が集まり、簡単に完成を祝った。

⑨ 昭和五六年八月二日、除幕式。駐日インド公使の祝辞、谷川先生、高良氏、内山先生らの挨拶があった。

⑩ 胸像は軽井沢町に寄贈され、町が維持管理することになる。

(5) 建像に関係のあった人たち

ここでは、胸像及び背後の塀に表記されている人たちについて、簡単に必要関連事項を述べておく。

高田博厚 現代彫塑家^そとしては国内有数の作家。滞仏三〇年、高村賞選衡審査員、元東京芸大講師。明治三三年生まれ、鎌倉市在住。

中村元^{はじめ} インド哲学者、仏教学者。大正元年生まれ、東京都在住。東大文学部印度哲学科卒業。東大教授、文学部長などを務めた。世界主要各国語に通じているだけでなく、インドやアジアの古代語などにも通じ、古代インド哲学を初め、アジア特にインドを基軸とする比較文化の研究で独創的な業績をあげた世界的な学者。著書多数、なかでも、この図書館にでもある『仏教語大辞典』は多年の心血を注いだ大冊である。

高良とみ氏の依頼により「アヒンサー」・「人類不戦」を書かれたという。

佐藤正人^{まさひと} 父の佐藤今朝市郎氏（町長在任七年）が亡くなられたあとを受けて、昭和四七年五月から引き続き四期目の町長をしている。中軽井沢駅前の旅館ますや本店の当主でもある。

谷川徹三 哲学者、文芸・美術評論家。明治二八年生まれ、東京都在住、京大哲学科卒業。法政大学教授、帝室博物館次長などを務め、宮沢賢治文学の研究・紹介者として活躍。のちに法政大学総長となる。

長男の谷川俊太郎氏も現代詩人として著名。

高良とみ^{こうら} 婦人運動・平和運動家。明治二九年生まれ、東京都在住。大正六年日本女子大英